

三宅島復興へ

火山ガス対策と航空機の「就航率」向上がカギ

都議会総務委員会として14日、三宅島視察を行いました。午前9時に江東区のヘリポートを出発。警視庁の大型ヘリ「おおぞら」に乗り、約1時間で現地に着きました。



上空から臨む三宅島。大噴火の傷痕は今も

到着後直ちに、三宅村役場（同所は、火山ガスの高濃度地区内にあるため、日常の業務は別の地域にある臨時庁舎で行われている）を訪問。庁内にある火山ガス観測システムや島内行政無線の設備等を視察しました。



火山ガスのため、本来の役場では業務ができない

その後、三宅島の自然情報を発信する「アカッコ（三宅島の鳥）館」や島内唯一の特別養護老人ホーム、郷土資料館、そして、平成25年の東京国体での、トライアスロン会場に内定している阿古漁港周辺などを、駆け足で回ってきました。

三宅島の雄山（おやま）は平成12年9月に大噴火し、全島民が一斉に島外避難。平成17年2月に避難指示が解除され、それから約3年半が経過しています。久しぶりの明るいニュースとして、4月26日に、待望の羽田―三宅島間の航空路が再開されましたが、火山ガスの影響で就航率は58.2%と低調。復興へは「就航率アップと、（島内に2地区ある）ガス高濃度地区対策の2つが最大テーマ」（平野村長）といます。



復興が進む岸壁で平野・三宅島村長と

なお、昨今の原油高も島の生活に暗い影を落とし、14日現在のガソリン価格は1リットル245円。当然、漁船の燃料代も割高で、ほとんどの漁船が漁に出られず、島の復興に深刻な影響を及ぼしています。